

連載

忘れ得ぬ人忘れ得ぬ言葉 ⑥4

五木寛之 作家 — 68

ぼくらはポップな音楽で育ったのさ——ミック・ジャガー

私の座右銘

齋藤勝己 東京個別指導学院社長 — 70

昨日の我に今日は勝つべし

第一線で活躍する女性

藤岡奈穂子 女子プロボクサー — 84

「how or never」女子ボクシング界レジェンドの挑戦

二十代をどう生きるか

渡部暁斗 ノルディック複合選手 — 88

ウィナーではなく王道を突き進むチャンピオンでありたい

四書五経の名言に学ぶ ①1

田口佳史 東洋思想研究家 — 92

慎独（独を慎むなり）——『大学』

仕事と人生に生かすドラッカーの教え ④9

佐藤等 ドラッカー学会共同代表理事 — 94

自らの学び方についての知識に基づいて行動することこそ、
成果を上げるうえでの鍵である

人生を照らす言葉

鈴木秀子 国際コミュニケーション学会名誉会長 — 96

遠藤周作『深い河』

禅語に学ぶ ⑨5

横田南嶺 臨済宗円覚寺派管長 — 100

忍辱多力

人生百年時代を生きる心得 ⑩0

田中真澄 社会教育家 — 104

独立自営の人生に欠かせない
「良客形成力」を磨くために

時流を読む ③7

中西輝政 京都大学名誉教授 — 106

日本の安全保障政策は大転換の時を迎えた

風の便り ①9

占部賢志 中村学園大学客員教授 — 112

子育て論議を吟味する

意見・判断

吉村和就 グローバルウォータ・ジャパン代表 — 114

吉村和就

森岡清史 吉祥寺森岡眼科院長 — 118

1日3回のツボ押しで目を疲れから守る

千支九星学

井上象英 — 122

小説・徳川家康 ⑥9

童門冬二 作家 — 130

新しい旅のはじまり

致知随想 — 77

西村詠子 がんになっても自分のまま生きる

北浦明雄 「Zの精神」が道を拓く

中澤照子 優しさの連鎖が広がる社会を目指して

藤森二郎 フランスパンの神様に教わったこと

小堀馨子 歴史画は故実に拠るべし

こまく — 121

プレゼント — 125

BOOKS「書評」 — 126

まんがへうちの社長の器学へ神保あつし — 129

木鶏クラブ通信 — 136

編集後記 — 146

日本の 水が危ない!

水を制する者は国家を制する

グローバルウォータ・ジャパン
代表

吉村和就



よしむら・かずなり ―昭和23年秋田県生まれ。大学卒業後、企業勤務を経て、平成10年国連ニューヨーク本部、経済社会局・環境審議官に就任。17年グローバルウォータ・ジャパン設立、代表に就任。著書に『水ビジネス 110兆円水市場の攻防』（角川書店）『図解入門業界研究 最新 水ビジネスの動向とカラクリがよ〜くわかる本』（秀和システム）など多数。

世界人口の半数が 水不足に陥る

数年前、来日したサウジアラビアのサルマーン国王とホテルで懇談した時のことである。ルームサービスで水が提供されるのを見た国王が怪訝な顔をして、「私は水を注文していない」とおっしゃるのを聞いて、我われ日本人との認識の違いを実感した。砂漠に住む彼らにとって水は大変希少であり、有償で飲むのが常識なのだ。

自国に水源があり、それを安全に利用できる国は、国連加盟国百九十三か国のうち僅か二十一か国しかない。大半の国は、多国間を流れる国際河川に水源を頼り、激しい水の争奪戦を余儀なくされているのである。

恵まれた自然環境と先人の努力のおかげで豊かな水資源を享受してきた我われ日本人は、残念ながらそうした世界の現実と疎く、水の大切さや、水を守ろうとする意識に乏しい「水ボケ」状態に陥ってしまっている。

私は水環境の専門家として国連の環境審議官を経て、世界が直面する水の問題に長年取り組んでき

た。活動を通じて、日本の豊かな水環境は決して未来永劫盤石なものではないことを痛感すると共に、日本人が水の重要性に目覚め、一刻も早く「水ボケ」の状態から脱却しなければ、世界が直面する深刻な水問題に早晚呑み込まれてしまうという強い危機感を抱いている。長年水に関わってきた専門家の立場で、まず世界がいま直面している水問題について記しておきたい。

一人の人間が一年間に使用する水は千七百立方メートルといわれ、それより少なくなれば水ストレス、つまり日常生活に不便を感じる状態に見舞われるといわれている。そして二〇三〇年には世界人口の半数、約四十億人もの人が水ストレスに見舞われることが予測されている。主な要因は、急速な人口増加と地球温暖化である。

過去百年の歴史を繙くと、人口増加率の二倍の水が必要になることが明らかになっている。現在八十億人の人口がいまのペースで増え続け、一・二五倍の百億人に膨れ上がった時、既に不足している水が現在の二・五倍も必要になる。水不足に拍車をかけるのが、地

球温暖化に伴う異常気象である。水資源というのは、必要な時に必要な量と質が手に入らなければ資源として活用できない。ところが、近年は各地で旱魃^{かんばつ}が長期化して土地が干上がった、逆に洪水を起こすほどの異常な豪雨が頻発し、水の安定供給が極めて困難になってきている。

また、かつて赤道近辺の海水は太陽の熱によって温められ、蒸発して雲になり、温帯地域に雨をもたらしていた。しかし、地球温暖化で過剰に温められるようになった海水は、カナダやロシアといった高緯度地域に大量の雨や豪雪をもたらすようになっていく。

これらの地域では、大量の降雨を想定した水インフラが十分整っておらず、またその治水技術にも乏しいため、深刻な水害リスクが高まっている。その一方で、これまで豊富な雨量の恩恵を受けていた温帯地域は、十分な降雨に恵まれなくなり、世界における水の偏在が急速に進みつつある。

もちろん日本も例外ではない。日本の水の約三割は、これまで梅雨と台風と積雪によって賄^{まわ}われてきた。ところが地球温暖化により、

梅雨前線は日本列島に長く止まらなくなり、台風の進路は無軌道になり、そして積雪はこの百年で約三割も減っている。

私たちが日々使用している水は、山間部に降った雨や雪が地中にしみ込み、地下水となり、湧き水となって川へ流れ込み、十年から五十年、長い時には百年の歳月を経て私たちにもたらされる。しかし、地球温暖化による異常気象がこのまま続けば、日本はこれまでのように豊かな水資源に恵まれた国ではなくなってしまうのである。

水資源はすべての経済活動の源

世界の文明は、いずれも豊富な水を湛^{たた}えた大河の畔で発祥している。大きな河の流域で文明が発達するのは、暮らしに必要な水がすぐ手に入り、作物をつくりやすく、船を通じて一度に多くの物資を輸送できるからである。人の暮らしが豊かになり、文明が発達する上で、水は不可欠なファクターなのである。

『古事記』や『日本書紀』では、我が国は「豊葦原の瑞穂^{みずほ}の国」、即ち葦が豊かに茂り、稲の穂が

瑞々しく実る豊かな国と讃^{たた}えられている。つまり、豊富な水資源によって国の発展が支えられてきたのである。水にまつわることわざや格言が世界で最も多いことから、日本の先人たちが水の重要性を熟知していたことが窺^{うかが}える。特に、熾烈^{しりつ}な覇権争いを展開していた戦国大名は、領国繁栄のために治水事業に真剣に取り組んでいた。

例えば武田信玄は、暴れ川といわれた笛吹川の治水や、信玄堤という独自の堤防の建設等で洪水に備え、領国の発展に尽力した。また、加藤清正は領国を白川の洪水から守るために治水事業を行い、立派な城下町を築いた。さらに徳川家康は、水害の絶えない湿地帯であった関東平野を、利根川の流れを変えることによって発展させ、江戸の町を当時百万人が住む世界有数の大都市へと発展させた。

現在、私たち日本人が豊かな水環境を享受できるのは、こうした先人たちの尊い努力の積み重ねの結果であることを自覚すると共に、水を制する者は国家を制すること

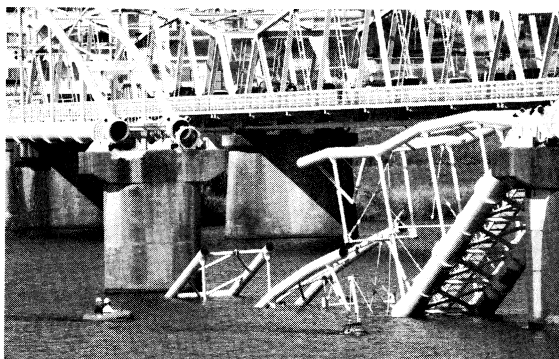
を学び取らなければならない。現実には、水資源はすべての経済活動の源になっている。農業はも

ろろんのこと、火力発電所も原子力発電所も水がなければ稼働できず、半導体も超純水がなければ製造できない。そして、地球の未来のために目下世界中で取り組まれているSDGsの十七の目標も、水環境という基盤が十分整った上でなければ実現不可能といっても過言ではないのである。

外国資本に買収される日本の水源地

ここからは、日本が直面する水問題を具体的に挙げていきたい。

日本が早急に手を打つべき問題の一つが、水インフラの再構築である。日本の上下水道の多くは昭和三十年代の高度経済成長期に敷設されたものである。既に還暦を迎えて老朽化が著しく、各地で発生する漏水は年間約二万件にも上る。一昨年は和歌山市の六十谷水管橋が崩落、昨年は静岡市の清水区が台風に見舞われ広域にわたる断水が発生し、被害は年々深刻化している。日本人の生活や経済活動を守るためにも、水インフラのリニューアルは待ったなしである。また、水インフラの老朽化は、国防にも深刻な影響をもたらす。



崩落した和歌山県の六十谷水管橋。水インフラの整備・強化が急がれる ©時事フォト

昨年末には防衛費の増額が決定したが、日本の防衛は軍備を整えるだけでは不十分である。国内百六十二か所に及ぶ自衛隊基地は、水道をはじめとするインフラを各々地元の市町村に依存している。ロシアのウクライナ侵攻で明らかになったように、地元のインフラが攻撃を受ければ自衛隊はたちまち身動きがとれなくなってしまう。有事を念頭に、基地を支える独自のインフラを早急に整備することが急務であり、インフラの強靱化こそが国防の要になるのである。

もう一つ看過できない問題が、外国資本による日本の大切な水源地の買収である。既に北海道のニ

セコや富士山麓、阿蘇山麓など、重要な水源地の買収はかなり進んでいる。

中国では、外国人の土地所有権は認められていない。またアメリカは、所有権は認めるものの、大統領の命令一つですぐに差し止められるようになっていく。しかし日本は完全に無防備であり、外国資本に買われ放題である。水源を他国に押さえられると、下流に住む人々は水を自由に使えなくなってしまう。まずいことは分かっているが、日本にはそれに歯止めをかける法律がないのである。

国は最近になってようやく重要土地利用規制法を定め、防衛施設や重要インフラ、一部の離島については買収を防げるようになったが、そこに水源地が加えられなかったのは痛恨の極みである。

自治体によっては、独自に外資による水源地の買収を禁止する条例を定めたところもあるが、罰則の額は例えば埼玉県では五十万円と、ほとんど抑止を期待できないレベルのものに止まっている。その上、外国資本は国籍を明かさず日本人を代理人に立てるなど、買収が巧妙化していることも事態把

握を困難にしている。

水環境は

国家の盛衰を左右する

日本がこうした問題に十分対処できずにいるのは、国家にとって水がいかに重要であるかを理解し、真剣に取り組もうとする政治家が皆無であることが大きい。

その点、元衆議院議員の中川昭一氏は、私がこれまで出会った政治家の中でも水の重要性を最もよく理解されていた。私は二〇〇七年に中川氏の要請を受け、自民党本部で五十三回にわたり水に関する勉強会に参加し、水の安全保障戦略を確立することの重要性を訴えた。あいにく中川氏の急逝によってその議論が断ち切れになったことは残念でならない。

生前、「私は『水大臣』をやりたい」とまでおっしゃっていた中川氏の遺志を受け継ぎ、水環境は国家の盛衰を左右することを理解し、日本の水問題に本気で取り組む政治家の出現が切望される。そのために、我われ有権者が水に対する意識を高め、世論を盛り上げていかなければならない。

日本は現在、生活や産業の基盤

となる化石燃料に毎年約二十兆円もの国富を投じている。しかし、豊富な水資源という宝にもっと目を向け、これを活用した新しいエネルギーの開発や、日本の進んだ治水技術を海外にも提供することによって、日本は自国の経済振興を実現すると共に、他国の成長にも貢献できるはずである。

冒頭に記した世界の人口増加により、今後特に水の需要が激増することが予測されるのが東南アジアであり、世界の約六十二％の水が必要になるといわれている。また、間もなく中国を抜いて人口世界一になるといわれるインドも、国民を養うだけの膨大な水資源の確保が必須である。しかし、いずれも十分な水道インフラが整っておらず、これから深刻な水問題に直面するであろうこれらの国と地域発展に、日本は優れた技術をもって寄与できるはずである。

日本はいつまでも「水ボケ」状態に陥っているわけにはいかない。水を制するものは国家を制するという自覚のもと、水を活用した新たな成長機会を掴むと共に、世界に貢献していくことを私は願ってやまない。